

今年はあるという間に夏が終わり、学園通りもすっかり秋の風情です。新着本をまとめて出しました。ぜひ読書の秋のお供にしてください！



1. 平成 29 年度 6~8 月の貸出数

	中1	中2	中3	高1	高2	高3	合計
6月	164	93	170	30	22	43	522
7月	123	65	218	53	41	14	514
8月	20	45	95	13	10	11	194
今年度累計	924	474	768	147	108	125	2546

6~8月の個人貸出数ランキングは、1位 58冊（中3-3）、2位 29冊（中1-4、中1-4）、4位 21冊（中2-4）、5位 20冊（中3-1）、6位 19冊（高1-3）、7位 18冊（中2-3、中3-1）です。

2. クラシックのCDが入りました

クラシックのCDが、250枚程度入りました。貸出は1週間です。まだまだ人気の、直木賞受賞作『蜜蜂と遠雷』（恩田陸著）のピアノ曲を集めたCDもありますよ。CDは、AVコーナーで視聴することも可能です。円形書架の前のコーナーでは「音楽」に関する本や小説を特集しています。

3. 花マル子ちゃんよりお願い…

予約本を取りに来てください。取り置きは1週間です。資料が届いたら図書館のカウンター横に貼り紙をします。一週間が過ぎると次の人に回してしまいます。

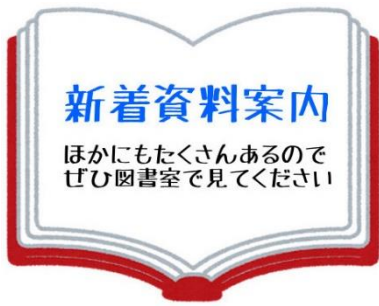


延滞資料がある人は、早めに返却してください。B1玄関の返却ポストも利用できます。（ただしCDとDVDは直接カウンターへ！）

4. 植物は好きですか？

図書室中央の木は、観葉植物として人気の「ショウナンゴムノキ」です。学名は「フィカス・ピンネンディキー」。この「学名」、図鑑には必ず載っている、ラテン語表記の世界共通名称なのですが、気にしたことはあるでしょうか。これは、18世紀にリンネという学者が、動植物を分類するのに「属名+種小名」の二分法を考案し、現在まで受け継がれているものです（リンネは、人間にはホモ・サピエンスという学名を与えました）。現在では、学名をつけるための国際ルールが決められています。1990年代からはDNA解析による分類学が主流になり、分類系統学も大きく変わりました。現在出ている図鑑も、新しい分類によるものが増えてきました（最新は、APGIV・2016年）。皆さんが大人になる頃には、図鑑や事典の内容も大きく変わっていることでしょう。





『キッチンハイク！突撃！世界の晩ごはん』

山本雅也著 集英社 383.8/Y31

世界中の見知らぬお宅で、家庭料理を堪能！ 大胆な調理、微妙な味付けなど、様々な食卓に、450日かけて出会います。勝手にイメージされたその国のあり方よりも、目の前の食卓にこそ、現実があることに気づかされます。筆者のつぶやきそのままの、軽快さがある文章なので、一気に読めます。



『天才たちの日課—クリエイティブな人々の必ずしもクリエイティブでない日々』

メイソン・カーリー 著 金原瑞人・石田文子 訳 159.2/C96

天才と呼ばれた人たちの輝かしい作品や功績は、毎日の習慣（デイリー・ルーティン）の積み重ねがあったからこそ生み出されたものかもしれない。素晴らしい芸術作品や発見の影には、多くの苦難や失敗もあり、天才とよばれた人たちが、その人なりにどんなことで心を落ち着かせたのか、どんな行動をしていたのか、どう時間を過ごしていたのか知ることは興味深い。毎日の習慣を知ると天才も普通の人間だったのだと実感でき、自分もまた天才の一人なのかも思えてくる一冊。



『自分を支える心の技法』 名越康文 医学書院 498.39/N46

「なぜ、私は小さい事に腹が立つのだろう。」「なぜ、あの人はいつも怒っているのだろう。」こんなふうに、思ったことはありませんか。対人関係や心のコントロールの鍵は、「自分の心」にあるのかもしれませんが。心のコントロールや良好な対人関係を築くための、エクササイズや瞑想の基本など、実践的な方法が紹介されています。心の中の「怒り」を排除し、明るい心を手に入れましょう。

『僕たちが何者でもなかった頃の話しよう』 山中伸弥・羽生善治・是枝祐和・山極壽一・永田和宏 文春新書1118 159.7/Y34

ずらりと並んだ著者たちの名前から、「iPS細胞」「将棋」「映画監督」「霊長類研究」などのキーワードが浮かぶひとも多いでしょう。間違いなくそれぞれの分野での歴史に名前の残るであろう彼らが、「何者でもなかった頃」に、どんな風に悩み、失敗し、そこから立ち上がってきたのかが、それぞれの言葉で語られています。同時代の偉人の生の言葉、今が旬です。読んでおきましょう！



『字が汚い！』 新保信長 文藝春秋 728.9/Sh59

自分の字に、自信はありますか？ もっと上手に書けたら……と思う人が多いかもしれません。この本の筆者も、そのような悩みを抱える中、いろいろと試行錯誤します。美しさよりも、読める字。そして、親しみのある字でいいのではないか！という筆者の考えに触れたとき、自分の字が好きになります。



『ダンナ様はFBI』 田中ミエ 幻冬舎文庫 916/Ta84

「どうやって私の連絡先を？」仕事一筋だった私に一目惚れした男性は、元FBI捜査官。私の身の回りを調べ上げて熱心なプロポーズを続け、その特殊能力と知識で、全力で私を守ろうとしてくれる。こんなに素敵な男性は現実にはいないだろうな、と思ったらなんと実話でした！

